

研究実践報告

## 配偶者目線からの教員論

三 石 直 人\*

How Teachers are Seen from Partner

Naoto MITSUISHI\*

### 1. 目 的

本稿の目的は以下の2点である。

1) 本学会員の多くを占める教員当事者ではなく、家族からの目線で教員を描く。すなわち、完全な第三者ではない教員当事者と第三者の間の境界に立つ視点からの考察・提言を寄せる。これにより、本稿を読まれる方に対し、新しい視点や思考の拡がり、気付きに繋がる何かを提供出来れば嬉しい限りである。

2) 同様の立場を持たれる方、夫婦だけでなく教員の関係者を含む、に対して本稿が何か1つ波紋となり、それぞれの応答に繋がっていき、世の中が少しずつ動いていく助けになれば、という願望。

### 2. 背 景

筆者は機械工学を専門とする設計者である。設計者とは何をする人、ということだが、「より良い未来を目指して、地球・社会・人が必要とする価値を製品に落とし込み、具現化する人」である。難しく書いたが「環境にやさしく、社会・人のためになる製品を具現化する人」である。この意味では「より良い未来を目指して子ども達の成長をサポートし、子ども達が自分で考える力が育つ環境を計画し、具現化して提供する」という教員の皆様と目指す姿としては同じ方向を向いており、やり方が違うだけ、と捉えて頂ければと思う。

私が今回、『広島文教教育』へ投稿するモチベーションを持ったのは、妻が元教員の徳本さ

んやOG仲間との対談をしている中で、私に対しても意見を求めてくれることがあった。そうして意見を交わしていく中で、徳本さんや妻が私の意見を面白がり、有難いことに発信を試みてはと提案頂いたからだ。それならば私としても減るものではない、ということで発信してみようと思った次第である。また、目的2)にも記載したが、この投稿を読んだ方が家族や親しい人達と話し合うことに繋がり、様々な考え方を共有し合い、それぞれの考える良い方向へ向かう取り組みに繋がれば、という期待も抱いている。

以上のところをモチベーションに記述している。冗長な文であるが、主観も交えた配偶者目線の教員論をお楽しみ頂けたら幸いである。

### 3. 本稿の構成

本稿は以下のように描く。

- 1) 配偶者から見る教員
- 2) 筆者的夫婦共働き生活論
- 3) 趣味を題材としたハードとソフトの話
- 4) 今後の展望

### 4. 配偶者から見る教員という立場

#### 1) 教員の環境

私が教員の妻と一緒に暮らしていく中で1番強く感じているのは現場で働く教員が、非常に複雑で動きづらい仕組みの中にいる立場となっていると思われることである。皆、子ども達にとってより良い環境を提供するために改善したい、という気持ちを持って日々取り組まれている。しかしながら文科省の学習指導要領、県の教育方針、学校の方針という様々な組織の一員

\* 初等教育学科26期生 三石春香の夫

として働く以上勝手に動くわけにもいかない色々な事情が重なり、現実のルールと子ども達に良い環境を整えたいという気持ちの板挟みにあっているというところを強く感じた。公務員ではない筆者からすると、やはり自分達でビジョンや目指す姿を決めてそこからルールを定める現場発信というところを出来ないわけではないだろうが、中々難しい状況・環境のもどかしさが一番にあるように見えた。

また、1年目から1人で担任を受け持つことが普通であることが私の目には非常に異質なものに映った。子ども達への対処だけでなく、ご家族や地域の方への対応等も取らざるを得ない状況に1年目から言い方は悪いが放り込まれる。非常に業務範囲が広いため個人が責任感を持って教職に取り組めるため成長の機会は民間企業より多いと思う。反面、社会人になってすぐに責任を持って業務を遂行しなければならないというのは非常に大変な環境にいるな、と見ていて思う。民間では少なくとも社会人一年目の失敗は上司の責任でしかない。教員1年目の失敗ももちろん主任層や管理職がサポートしているのは理解しているが、私からすると少なくとも初年度は躰の期間とは言わないが、報告・連絡・相談という所謂「報連相」を気軽に行える関係づくりを行うようにする期間だと認識している。そのような考えを持つ私からすると歯痒いと感じる環境下でも日々現場で頑張られている教師の方へのリスペクトは止まない。

## 2) 他業種から見える課題

一方で、デジタルネットワークを使うことが当たり前になっておりAIを活用した効率化を目指すような技術的な面だけでなく、カーボンニュートラルを目指すといった社会環境、また昨今様々な地域で発生している戦争を踏まえた地政学環境的にも大変革と呼ばれる時代にあって、明治以降脈々と受け継がれてきたこの国の教育制度も少し限界を迎えつつあるのではないかと感じている。従来の制度を変化させてから実行する方向ではなく、制度を現場主体でより柔軟に変えながら進んでいく、と少しずつ変わっていくのかもしれないと思う。もちろん家庭側からの理解あつての取り組みのところ

も多分にあると思うので、私の子どもが学校に入った際には教員の皆様の活動に関してはお互いに良い方向に行くものをサポートしていきたい次第である。

次に感じている点は時間がいくらあっても足りない、という点である。これはこれまでの現場からの報告で多く出ていると思うので、詳細を描くことは割愛する。子ども達へのエピソードを聞くに、その愛情は本物であると妻との会話からも感じる。ただし、やはり夫婦で生活を送っていると今の状態はとても良い状態とは思えない。機械的に処理できるはずの定型業務に追われる事が多く、本来やりたい仕事(子ども達に合わせた授業を行う計画・準備)をするには、時間が足りなくなり私生活を充実させることが出来なくなる点を強く感じる。こういったところに関してはAIによるサポートやプログラミングによる簡素化といった、技術でいかに普段の仕事を現場に負担なく簡素化・自動化出来るか、ではないかと考えている。どうもわが国は全員に平等に負担を課するのが当たり前という価値観が蔓延しており、その作業をいかに卒なくこなせるかというところに重きが置かれているように感じるのは正直虚しく感じる。本来各人が創造性を発揮できる子ども達のためにどのような授業を計画するか、というところに思考の時間を充てられるように技術の方でもサポートできないものか、と思わずにはいられない。タブレットを配布して子ども達をコンピュータに慣れさせるという取り組みをしていると聞いているが、そのコンピュータを使って授業がどれだけ楽に出来ているのだろうか？タブレットを配布することでやらなければならない現場の作業が増えてしまい疲弊に繋がってしまっている、というのは本末転倒である。

まずは子ども達の目の前にいる先生達がその恩恵に預かれることで、IT技術を使うことで世の中がより良い方向に進むと言うことを子ども達も肌で感じ取れるのではないだろうか？少なくともただタブレットを配布するだけではなく現場からも使い方の工夫を吸い上げて、子ども達にも教員にもそのような工夫を自分で作っていきたいと考えられるような環境になっていく

ことを望むのである。緩やかに変化していくか、非常に強い外圧により大きく状況が変わるかのどちらかになると思うが、昨今問われているのは先進国の中でも超高齢社会の先端を走る日本という国がどのような教育を目指すのかというのは、過去にない問いなのだろうというのは教育現場にいない私でも感じ取れるものなのである。

そんな中、非常に希望に満ちた感情を持つこともあった。妻に連れられて2023年10月28日に広島文教大学の研究発表大会に参加させて頂いた。その際に感じたのは文教という学校は非常にアットホームであるということである。先生達の雰囲気だけでなく、学校全体から感じる雰囲気全てが和やかで暖かみを感じた。それは学校の規模が小さいからだけではなく、やはり先生方、学生さん1人1人が自分に出来ることに前向きに取り組むからだだろう。また、本年の学会の研究主題が繋がりであったので、本稿のように領域外からの投稿、外圧とまでは言わないが「黒船」のような投稿も繋がりの一貫として捉えていただくことが出来るというところで、本学の懐の深さと温かみを感じているのである。少し冗談も入っているが、この非常に暖かい雰囲気の中で育った学生様はきっと、教育現場を暖めていく。ただ熱いだけではなく、適温という意味での暖かさを持つと確信している。そういった意味でも本稿が、学生様の何らかの行動に繋がっていくことを願うばかりである。

## 5. 筆者的夫婦共働き生活論

ここからは家族という切り口で教員論を組み立てようと思ったが、どちらかという共働きの生活について記載するため、共働き生活論というテーマで記載していく。人間の暮らしを語る上で外せないのは衣食住という3つの要素である。ここでは特に住・食の順で共働き生活から見えてきたものを述べさせていただく。結論から始めるとすると「お互いが寄り添う」という安易な言葉で終わらせず、以下を徹底すべきである。

- 1) 住生活：身体的負担は最小化。
- 2) 食生活：身体に取り入れる物を見直す。

### 1) 住生活

はじめに、我々の置かれていた環境を説明する。我々は2020年に結婚したのだが、当時私は広島県西部で、妻は広島県東部で勤務していた。ここで我々は最初の住宅を広島県中央部に構えた。両者の丁度中間地点に位置する、という実に「地理的に」公平な場所を選択したものだ。ここから私は電車で1時間。妻も車で1時間の通勤時間。絵に描いたような平等な選択なのだ。これぞ男女平等。もちろんそこでの暮らしも良かったし、今でも付き合いのある方々と巡り会っているのもそれはそれで良かったのだが、妻に非常に負担をかけていたことをここに告白する。何が起こったかと言うと、平日の妻は帰宅するなり疲れて眠ってしまうという日々が続いたのだ。週末には2人の時間を過ごすことが出来るが、平日は家に寝に帰るような状況であったのだ。考えてみると職場まで車で1時間ほど通勤に時間がかかるのだが、半分は高速道路での移動となる。平日の高速道路はトラックが多く、かつ非常に速いスピードで運転しているため、運転に非常に神経を擦り減らすことになるのだ。教員として授業を行い、何か事が生じれば子ども達の安全を確保した上でそれに対処し、放課後での会議や今後の授業計画等で頭を使った後に、一般道でさえ神経を使うのに、高速道路を運転させるような場所を住居とすることを選んでいた。もちろん最初はそのことに気づいてもおらずであった。自分の浅はかさを非常に後悔した。このように通勤で神経を使う毎日であったため、段々と疲れが溜まっていき、いつ事故に遭うかもわからないという不安のある状況を作ってしまった。そんな生活を半年ほどしてしまっただが、私の職場でリモートワークができるようになり、妻の勤務先に近い広島県東部へ住むようにした。この間、無事故で通勤できて本当に良かったと思っている。日々の暮らしで身体的な無理をしないこと。これは言葉にすると当たり前である。私自身もそう思う。だが中々気づけなかった反省点である。最初から妻の通いやすい場所に住まうべきであった。皆様も自分達がどのような環境を選ぶのが良いか今一度考えていただけたら幸甚である。

## 2) 食生活

唐突だが、筆者の趣味はコーヒーを淹れることと、カレー作りである。これらを趣味とすることで、実は味が水で決まると言っても過言ではない、ということが分かってきた。よくよく考えてみれば人間の体も60%以上は水でできている。基本は水なのである。たかが水、されど水。水に関しては所謂浄水器を通した水に触れられるように住宅環境を全面的に見直した。食に関しては肉中心から野菜中心の生活に変えた。どれだけ自然な状態のものを体に入れられるか、ということをお我々夫婦の一つのテーマにしたのだ。水／食を見直すことで10 kg以上適正体重より重かった私の身体は適正体重になった。もちろん健康状態も良い。あまりにも痩せたので、会社でもどうやって痩せることができたのか、問い合わせを受けるような状態である。男性社会に対しても少しばかりダイエット商法を流行らせることが出来るかもしれないと思った次第である。また、食環境を整えるようにしてから、独身の時は年に2度は風邪で寝込んでいたのだが、最近は年に1度寝込むことがあるかないか、ということまで免疫力を高めることができています。要は食を整えて健康になったのだ。結局は取り入れた物で人間は出来ている。

聞くところによると、岡山や栃木では地元の無農薬で栽培している農家さんから野菜や米を仕入れて給食に出している。いわゆる食の安全を保護者が活動して地域に根付いているとのこと。こういう取り組みも地元で進めていきたい。どのような化学物質で汚染されたものを食しているかわからないコオロギを食べるのは政治家だけにして欲しいものである。

これら1)、2)の2つの行動を徹底することで子どもを授かることができた。負担を減らし、食を改善することの重要性はひしひしと感じている。

そして、やはり教員の負担が如何に大きいことか、ということである。唯一私が結婚当初から出来ていたのは家事である。料理後の皿洗い、洗濯、掃除は私の担当と自然と決まり、今も続いている。世の中の男性よ。家事は仕方なくやるのではなく率先してやるべきなのである。惜

しいのはこれを見るのはほぼ女性なのである。と書いていたら、文教大学が共学になったというところで、男性の目にも留まることがわかった。惜しむらくは恐らく文教の学生さんは学生生活の中で家事を行う意識は十二分に芽生えているだろう、ということである。

## 6. 趣味を題材としたハードとソフトの話

4. の項目で技術を活用して自動化や簡素化といった話をした。コンピュータを駆使する制度の話はいわゆるソフトである。

またまた趣味の話になるが、私は建築物を鑑賞するのが趣味である。建築はハコモノなので、いわゆるハードである。結局は中身(ソフト)が大事なのであるとは思っている。その意味では現場で働く教員が作る授業はまさしくソフトであり、そこが1番重要なのは間違いない。しかし、毎日見て使う、触れる部分の素材や空間の感じ方というものとは何か感性に訴えかけてくれるかと思っている。特に構造というのは人の身体で言うと骨に当たるものなのだが、これがどのように構成されているかを見るのは非常に面白い。なぜかと言うと、非常に長い年月が経った時、最後まで残るのは骨であり構造であるからだ。最近の建物はSDGsとまでは言わないが、何十年後にも大事に使われるように、非常に考えられた構造を持つ建築が増えている。たちまち自分達がどのように利益を得るかという視点ではなく、未来に何を遺せるか、という視点で色々な事が考えられており、非常に参考になるかと思っている。何が言いたいかというと、設計者としては単純に合理的にモノを作るだけでなく感性に訴えるモノを作って未来のために貢献したい、ということと、そのように考える地域の人は実はかなりの数がいるかと思うと最近感じてきたのでなんとか上手く使えないかということなのである。

未来のために貢献したいと考えている地域の人が多い、という話について最近聞いた座談会の内容に触れる。島根県益田市で行われた「建築で街は変わった？」という座談会である。この会は2023年9月16日～12月4日まで島根県芸術文化センターグラントワで実施された企画展

「建築家・内藤廣／BuiltとUnbuilt 赤鬼と青鬼の果てしなき戦い」の関連プログラムとして筆者が尊敬する建築家である内藤廣先生と、これまた筆者が敬愛するホテルである益田市のマスコスホテルのコラボで実施された座談会である。概要を話すと、地域を盛り上げるために走ってきたマスコスホテルの代表・洪（コウ）さん、グラントワの学芸員・川西さんがグラントワの設計者である内藤廣先生を囲んでざっくばらんに話をしていく会であった。その中で、「上手くいかない時に自分をどう鼓舞し、自分の信念を貫いているか？」という質問をぶつけた。ここで帰ってきた答えは「自分が何を成し遂げたいかに都度立ち返る」という目的意識に根ざした洪さん。「プロセスはどうなっても構わないので、割と最終的な結論に至るまでの道筋を楽しんでいる」という川西さんの考え。「上手くいかないことなんて設計をやっていたら山ほどある。マスコスホテルのサウナに入り、気分をさっぱり入れ替える」という講演者への愛情と益田への愛をウィットに包んだ内藤先生のメッセージ。三者三様の在り方を感じつつ、全員が前向きに物事を捉えて未来を見据えて日々物事を進めている、ということの勇気を貰えたため、皆様にも言葉をシェアさせて頂く。私なりに感じたのは益田という地方に生きるという覚悟とその生き様である。一転して私が暮らしている広島という街は経済と切り離せないため、特に中心部では東京に似たような街づくりに向かってしま

う。では中心から離れた地域はどうなっているのか、ということ、実はそこに生きる人々が力強く様々な活動を行っていることがわかってきた。先に挙げたマスコスホテルの代表やグラントワの美術員の方々はそういった方々の代表として私の目には映った。では私に何が出来るか、田舎からの発信だけでなく、田舎の中を活性化している取り組みを少しずつ始めて行こうと思う。まずは私自身が住んでいる街の魅力を語れるように色々な行事や活動に参加し始めた次第である。好きこそもの上手なれとはよく言ったもので、まずは好きになることから始めるのである。そのような輪を自分達に出来る形で少しずつ広げていこうと思う。

## 7. 今後の展望

今後も細々と発信し、自分の身近なところや地域を盛り上げながら元気な未来を次の世代に渡せたら、と思っている。そのように生きるための考え方のベースを記載したつもりではあるが、読み物としてふんふん、と一助にして頂き、親しい人との会話のキッカケとなればよいと思っている。

最後に、今回のように文章を書くキッカケを与えてくださった徳本さん、その場を与えてくださった文教教育学会の皆様、私の遅い執筆を優しく見守ってくれた妻に感謝の意を示し結言に代えさせて頂く。